

日本分析化学会第60年会

1 はじめに

日本分析化学会第60年会は、2011年9月14日から16日までの3日間、名古屋大学東山キャンパスで開催された。この年会は関東支部の担当で、当初東京工業大学大岡山キャンパスで開催予定であった。しかし、2011年3月11日に起きた東日本大震災による関東地区の電力需給の逼迫の予想を受けて、4月の日本分析化学会理事会で、開催地を名古屋大学に変更、運営はそのまま関東支部中心の実行委員会が行うことが決定された。結果的には、関東地区での開催に支障はほとんどなかったと思われるが、3月から4月にかけての社会状況を考えると、今回の変更は正しい判断であったと考えている。第60年会での講演数はシンポジウム、受賞講演などを合わせて820件、参加登録者数は1345人であった。交通利便性の高い名古屋での開催であったこと、震災の影響により春季の学会が軒並み中止になったこともあり、会期変更に伴う他学会との会期の重複にもかかわらず、盛会であった。

2 講演

[プログラム責任者：渋川雅美 (埼玉大)、会場責任者：平山直紀 (東邦大)・森田成昭 (名古屋大)、ポスター会場責任者：原田 誠 (東工大)・松宮弘明 (名古屋大)]

口頭発表

工学部1号館、2号館、3号館を会場に、一般講演245件、若手講演161件、研究懇談会講演21件、テクノレビュー講演3件が、12の講義室を利用して行われた。今回の口頭発表における特徴は、新たにロングディスカッション講演を導入したこと、若手講演賞を設けたことである。ロングディスカッション講演は、講演20分+討論10分で行う講演であり、通常の15分の講演に比べて議論を掘り下げていただくことを目的に新設した。主に、30分講演の機会が少ない比較的若手の講演

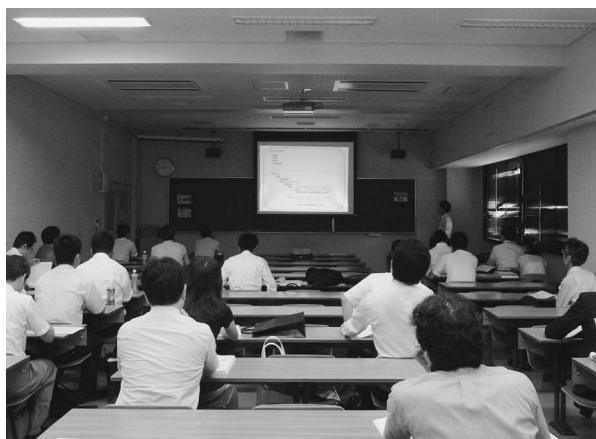
者を想定したものである。講演申込み時に要旨の提出を求め、それに基づいてプログラム部会で15件を選定した。この講演の演者には、講演終了後ロングディスカッション講演証書が渡された。若手講演では、各講演に対して3名の審査員が採点

表1 第60年会分類別講演申込及び聴講者一覧表

分類	一般講演者数	若手講演	テクノレビュー	最大聴講者数	一般ポスター	若手ポスター
01: 原子スペクトル分析	19	4		56	3	3
02: 分子スペクトル分析	18	7		45	6	10
03: レーザー分光分析	8	3		35		3
04: X線分析・電子分光	9	2		32	6	13
05: 放射化学分析						4
06: NMR, ESR, 磁気	2			20	1	
07: 電気化学分析	9	11		45	1	6
08: センサー	10	13		45	8	10
09: 熱分析	1			30		
10: 有機微量分析					3	
11: 質量分析	6	4		30	7	5
12: マイクロ分析系	7	8		45	2	2
13: FIA	14	5		45		5
14: LC	9	12		60	22	7
15: GC	7		2	40	8	1
16: 電気泳動分析	5	5		46	2	13
17: 溶媒・固相抽出法	13	12		50	8	12
18: 分離・分析試薬	6	4	1	41	8	2
19: 分析化学反応基礎論		2		40	2	3
20: データ処理	2			19		1
21: 標準試料	2			32	2	4
22: サンプリング, 前処理	3			35	4	3
23: 界面・微粒子分析	11	20		60	4	16
24: 宇宙・地球	5	5		50	1	1
25: 地球環境関連分析	27	13		80	19	20
26: 無機・金属材料分析	4	1		55	4	1
27: 有機・高分子材料	5			56	4	4
28: 生体・医薬・臨床	15	10		65	20	7
29: バイオ分析	25	18		67	13	9
30: その他	1	2			4	1



第60年会受付付近



講演会場

に当たり、最終的に28名が講演賞に選ばれた。受賞者には、後日実行委員長名で表彰状が贈られた。

上述の講演に加えて、奨励賞、技術功績賞、JAIMA賞、CERI賞の受賞講演が、関連会場で行われた。

若干会場が分散気味であり、会場へのアクセス案内が足りないのご指摘があった。実行委員会が会場に不慣れであったこともあり、参加者の動線を完全には把握しきれなかったためにご迷惑をおかけした。この場をお借りしてお詫びを申し上げる。

豊田講堂のホワイエで展示会とともに開催された。ポスター発表コアタイムは、掲示時間90分、発表時間45分で行われ、ややあわただしいものであった。今回の会場はかなり広がったが、同時に掲示できるポスター枚数にはある程度制限があり、さらに2日目の午後を除いた日程ではこのような忙しいスケジュールにならざるを得ないのかもしれない。若手企画として、第1日目に若手ポスター発表166件が行われた。このうち、14件がポスター賞に選出され、ミキサーで表彰式が行われた。2日目の午前と3日目には一般ポスター発表が行われ、161件の発表があった。ポスター会場の豊田講堂と口頭発表会場とは500m近く離れていた。暑い時期でもあり、会場間の行き来が大変であるとの声が多数聞かれた。

3 特別シンポジウム

今回の年会では例年以上に充実した特別シンポジウムが開催された。

- ・若手シンポジウム「ヒラメキをユーザーへ ～産学官連携物語～」(9月13日午後)、
オーガナイザー：大橋 朗(茨城大)、加藤尚志(産総研)
- ・ソフト界面を活かした分析化学(9月14日午後)、オーガナイザー：前田瑞夫(理研)、吉本敬太郎(東大院総合文化)
- ・工業分析最前線 ～分析は生産技術の要だ！～(9月15日午前)、オーガナイザー：野呂純二(日産アーク)、火原彰秀(東大)
- ・NMRによる定量分析がもたらす新たな機器分析の可能性(9月15日午前)、オーガナイザー：齋藤 剛(産総研)、加藤尚志(産総研)
- ・キャリアパスシンポジウム：企業や研究所でプロフェッショナルとして活躍する分析化学者の昔・今・そして将来の夢(9月15日午後)、オーガナイザー：由井宏治(東理大)、野呂純二(日産アーク)
- ・最先端医療を支える分析化学(9月16日午前)、オーガナイザー：石濱 泰(京都大学)、金澤秀子(慶應義塾大学)
- ・宇宙と生命をつなぐ分析化学—顕微鏡で宇宙を探り、望遠鏡で生命を探る—(9月16日午後) 一般公開、オーガナイザー：小林憲正(横浜国大)

年會会期の前日に若手企画のシンポジウムが開催され、さらに、時間帯によっては二つのシンポジウムが同時進行するという好企画の目白押しであった。2日目の午後にも学生対象のキャリアパスシンポジウムが行われた。式典や授賞式の時間帯に講演が行われることに対する批判もあると思われるが、シンポジウムと式典・授賞式では、出席者の年齢層や立場が異なる



ポスター展示会場

こと、今回のシンポジウムは立ち見が出るほどの盛況であったことを考慮すると、今後のシンポジウム企画の参考になるのではないだろうか。

このほか、日本分析化学会震災対応WGの企画として、最終日の午後に「東日本大震災関連特別講演会」が一般公開で開催された。

4 付設展示会

[責任者：本田俊哉(日立)、塚原剛彦(東工大)]

ポスター会場で付設展示会が開催された。今回は、機器展示に23社、カタログ等の展示に5社のご協力をいただいた。例年どおり、ポスター会場内で展示会を開催したため、多くの来場者があり、展示各社にはおおむね好評であった。幕張で行われた分析機器展からわずか1週間後に年会が開催されたため、出展各社の負担は大きかったと思われるが、それにもかかわらず多くの企業に出展していただいたことにこの場を借りてお礼を申し上げる。今回は他の選択肢がなかったためにやむを得ないが、開催時期の決定には他の学会・展示会の開催時期にも考慮すべきであろう。

5 ランチョンセミナー

2日目の昼休みに6社によるランチョンセミナーが開催された。出席者は昼食をとりながら、企業の宣伝を兼ねたセミナーを聞くと言うものである。以前の年会ではチケットがきつなかったことが問題になっていたが、今回は早々にチケットがなくなるセミナーもあった。今回は、参加各社の意向により実行委員会で昼食の弁当を手配したため、昼食の内容は画一的なものであった。セミナーの本質ではないが、参加各社に昼食の内容を含めた企画を検討いただくと、出席者にとってより魅力的な催しになるものと期待される。

6 創立60周年記念式典、学会賞等授賞式など

2日目、12時45分から豊田講堂ホールで日本分析化学会創立60周年記念式典が開催された。中村会長の挨拶の後、60周年記念事業報告に引き続き、名誉会員の推戴式が行われた。ご出席の新名誉会員の先生方(木村 優、辻 章夫、中川照眞、保田和雄各氏、松井正和氏は都合により欠席)にメダルと推戴



記念式典での名誉会員推戴式

証が渡され、先生方から挨拶があった。最後に中村会長の記念講演があり式典はお開きとなった。

式典に続いて、学会賞等授賞式が開催された。学会賞、学会功労賞、奨励賞、技術功績賞、有効賞、JAIMA賞とCERI賞の賞状、副賞等が贈呈された。従来JAIMA賞とCERI賞の授賞は東京コンファレンスで行われていたが、今年から年会で行われることになった。授賞式の後、学会賞受賞者、楠文代、廣川健、吉村和久の3氏による受賞講演が行われた。

7 ミキサー、懇親会

ミキサー〔責任者：原田 誠（東工大）〕は、ポスター会場、初日の17時45分から行われた。参加者は、一般71名、学生47名であった。学生の参加を奨励するために、料金の値下げ（学生2,000円）、若手ポスター申込み要領に参加を促す記載、開始時間の前倒しなどの措置をとった。残念ながら、学生の参加者数はあまり伸びず、ミキサー会場内で行われたポスター賞授賞式でも、受賞者がほとんど会場にいないという寂しい結果に終わった。指導教員から参加を奨励するなどの一層の積極的な措置が必要かもしれない。

懇親会〔責任者：宮村一夫（東理大）〕はメルパルク名古屋で、第2日目の18時30分から行われた。約350名が参加し盛会であった。冒頭の岡田実行委員長の挨拶の中で、年会の開催地変更に関する事情の説明があり、会場確保や運営に特段の配慮をいただいた北川邦行中部支部長を始めとする中部支部の関係者に特段の感謝の意が表された。引き続き、中村会長の挨拶、来賓の西山久雄名古屋大学大学院工学副研究科長に祝辞をいただき、赤岩英夫先生の乾杯のご発声で懇親会がスタートした。津越敬寿（産総研）、沼子千弥（千葉大）両氏の司会でテンポ良く進められ、スピーチは短く、また特別な出し物などはなく、シンプルスタイルを貫くものであった。途中出席者による隠し芸が披露されるなど終始和やかな雰囲気で行われた。20時30分過ぎに角田関東支部長の挨拶、北川中部支部長の2次会に関する提言などがあり、三々五々お開きとなった。

8 さ い ご に

はじめに述べたように、今回の年会は北川中部支部長を始め



懇親会、赤岩先生の乾杯のご発声

とする中部支部の協力のお陰で開催にこぎ着けたというのが、正直な印象である。年会の成功に向けて支部を越えた協力があった点で、学会の新たなページを開くことができた。また、会場と会期の変更にもかかわらず、当初予定していたシンポジストの方のほぼ全員に参加いただくことができ、学会活動の拡大に多少とも寄与できたものと考えている。これらの点は、学会自体が継続的に縮小傾向にある中、大変有意義であった。

来年以降の年会に向けていくつか気付いたこと、記憶に留めておくべきことを最後に述べて本稿を終えることにする。本年会では従来どおり分厚い要旨集を印刷して、参加者に配布した。学会参加者には印刷物が便利である一方、印刷所から配送された要旨集の開梱が前日の準備では最も大変な作業であった。また、重い要旨集を持ち歩くことに抵抗を感じる方も多いのではないだろうか。環境負荷の観点からも紙ベースの要旨集はそろそろ考え直す時期に来ているのかもしれないが、60年会では要旨集の形態まで考慮する余裕はなかった。今後、ぜひ検討をお願いしたい。また、「展望とトピックス」は、昨年まで「展望とトピックス小委員会」で抽出、選出、資料作成、記者会見等の作業を行っていた。しかし、この小委員会が廃止され、本年会からは実行委員会で行うことになり、60年会ではプログラム部会が担当した。ただ、プログラム作成と時期が完全に重複するために日程が大変タイトである。また、過去の抽出対象データを支部間で引き継いで行く点でも今後の困難が予想される。このまま「展望とトピックス」を継続するのは実行委員会の負担が大きく、他の仕掛けを考える必要があると思われる。これらの問題点を含めて、年会や討論会開催については、会場や担当支部特有のローカルな問題がある一方で、ノウハウの引き継ぎで省力化できる部分も多い。支部間の連絡を緊密にすることで、担当支部や担当者の労力を軽減でき、それが年会等の成功につながるのではないだろうか。

〔第60年会実行委員会 岡田哲男、長谷川 健〕